

試験で配付する問題冊子はB4判です。

令和8年度 学校推薦型選抜（一般枠） 入学試験問題

専門課題 小論文

（初等教育コース 初等教科専攻 社会専修／中等教育コース 社会専攻）

〔注意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 監督者の指示に従って、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3. この冊子は問題用紙3枚と下書き用紙2枚です。この冊子と別の解答用紙は2枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4. 解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5. この冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近年インターネット上では、「ナチスは良いこと
もした」と声高に主張したがる人が増えている。
アメリカのトランプ現象やヨーロッパの排外主義
運動といった近年の国際情勢を反映してか、わが
国でもナチズムへの社会的関心は高まっているが、
一般に出回っている情報には著しく不正確なもの、
とうに否定された俗説も少なくない。

実は二〇二二年二月に、筆者(田野)にそのこと
を痛感させるような出来事があった。発端は本書
の「はじめに」で触れた予備校講師のツイートの
であった。これを受けて、筆者が「三〇年くらいナ
チスを研究してあげてナチスの政策で肯定できる
ところないですよ」とツイートしたところ、これに
膨大な数の批判が寄せられて「炎上」状態になっ
たのである。数百に及ぶ返信のなかで非常に多か
ったのは、ナチスの「良い政策」として失業対策

の成功、アウトバーンの建設、フォルクスワーゲ
ンの開発、歓喜力行団の旅行事業などの「反例」
を挙げた意見で、「三〇年も研究していてそんな
ことも知らないのか」と言わんばかりの嘲笑的な
コメントも多数あった。

もちろんナチズム研究者である筆者がそれらの
政策のことを知らないはずはなく、上記のツイ
トは、それでもやはり肯定できる場所はないと
いう専門家としての評価を示したものである。実
際、ナチスの個々の政策を詳細に検討していくと、
一見先進的に見える政策も様々なまやかしや不正
搾取や略奪と結び付いていたことは明白であり、
本書で説明してきた通り、近年の研究ではそこに
ナチズムの犯罪的な本質を認める見方が定説化し
ている。筆者に「反例」を提示しようとした幾多
の人たちは、どこかで聞きかじった生半可な知識
をもとにナチスの政策を「肯定」しているにすぎ

ないように見える。信頼に値する研究者のなかで、
そのような主張をする者はいない。

戦争とホロコーストを引き起こしたナチスの悪
行はよく知られているはずなのに、なぜこのよう
な主張をしたがる人が多いのだろうか。筆者の見
るところ、彼らはむしろナチスの悪行を繰り返し
教えられてきたがゆえにこそ、それを否認しよう
とする欲求に突き動かされている。多くの人びと
はヒトラーを「悪の権化」と決め付ける「教科書
的」な見方に不満を抱き、「ナチスは良いことも
した」といった「斬新」な主張に魅力を感じてい
る。

筆者のツイートに寄せられた批判的なりづライ
を動機付けているのはおそらく、ナチスを「絶対
悪」としてきた「政治的正しさ(ポリコレ)」の専
制、学校を通じて押し付けられる「綺麗事」の支
配への反発である。ナチスの「良い政策」をこと
さら強調することで、彼らは自分たちの言動を

制約する「正義」や「良識」の信用を貶め、その
「抑圧」からの脱却をはかっているのである。

さらに「マルクス主義の蛮行はどうなる」「共
産主義国だって残虐行為をしたではないか」とい
う「Whataboutism」の論法(そいつこそどうなん
だ論法)とも呼ばれるの多用も、似たような動機
に由来するものと見ることができよう。筆者
に寄せられた批判のなかには、中国の人権問題な
どを持ち出して、ナチスの戦争犯罪を相対化しよ
うとする主張が数多く含まれていた。「ナチスを
批判するのに中国を批判しないのはおかしい」
「ダブルスタンダードではないか」というわけだ
が、中国がいかに酷い弾圧を行っているからとい
ってナチスの悪行が免罪されるわけではなく、両
者はあくまで別個の問題である。「ポリコレ」を
ひっくり返したいと願う人びとにとって、ナチス
を批判する発言はよほど煙たいのだから。そこで
ナチス以外が行った残虐行為を指摘することで、
「悪の相殺」ができるかのように錯覚してしまっ
たのである。

もちろん世の中の支配的な価値観をうのみにせず、たえず権威を疑って批判的に考える姿勢そのものは、けつして否定されるべきものではない。それはむしろ、学校教育において育成されるべき重要な資質・能力の一つだと言つてよい。「はじめに」で指摘した(解釈)、つまり歴史研究の積み重ねも、過去の研究を疑い、批判することによって可能になったものだ。だが「ナチスは良いこととした」と主張する人たちがあつては、そうした反権威主義的な姿勢はいわゆる「中二病」的な反抗の域を出ず、ナチズムが実際にどんな体制であつたかについては無関心であることが多いのだ。過去の研究の積み重ねから謙虚に学んで、それを批判的に乗り越えていく姿勢はほとんど見られない。そこでは多くの場合、学制的な価値観への反発が「教科書に書いていない真実」への盲信に直結している。一般に出回つている不正確な情報、怪しげなデマの類でさえ、「教科書的」な見方を否定するものであれば、いともたやすく「真実」と見なされる。

こうした危惧すべき状況は、「売らんかな」で出版される一般書のセンセーショナルリズムによつても助長されている。その種の書籍では、「ヒトラーのすぐれた経済政策を見習うべきだ」「ナチスはこんな凄い発明もしていた」といった人目を引く主張が行われているが、ナチスの戦争目的や人種主義、嘘や不正と切り離れた「先進性」の評価はあまりに一面的で、とうてい学術的検証に堪えるものではない。このような著しく歪んだイメージは、ナチズムがもつ社会的な意味合いの大きさを考えれば、民主主義社会の基盤をむしろ甚く深刻な問題だと言わざるを得ないだろう。

ナチスの免罪につながる不正確な情報の氾濫を食い止めるためには、専門知識をもつ研究者によるチェックが欠かせない。だが研究者の仕事は基本的に論文を書くことなので、いつまでも一般書の質保証に関わつていくわけにはいかない。また、「ポリコレ勢力」の一員と見なされること、多い専門家がいくらか間違いを指摘したところで、かくも多くの人がこの落とし穴にはまつてしまふ原因はほかでもなく、そうした情報が権威にとられずに「自由」に物を言いたいという欲求と、自分たちは「本当のこと」を知っているという優越感とを同時に満たしてくれる点にある。だからこそ彼らは、断片的な(事実)から(意見)へと飛躍してしまふことになる。この点について、社会心理学者ハラルト・ヴェルツァーは興味深い指摘をしている。「歴史知識」と「歴史意識」は分けて考える必要があるというのだ。学校や大学、マスメディアなどを通じて伝達される前者に対し、後者は「過去に対する感情的イメージ」であり、それこそが「学んだ歴史知識をどのように解釈し、利用するか」を決定するのだという。「過去」について「自由」に発言したい、そして自分たちこそ「真実」を知っている。そういう感情が先にあるために、教育やメディア、研究などによつて正確な知識が伝えられれば伝えられるほど、ますます反発を強めて「逃げ道」を探すようになるのである。

これを敵視する人々たちを納得させることは難しく、かえつて反発を強めてしまふこともある。筆者自身、ツイッター上である一般書の誤りを指摘した際に「粗探した」といった非難を受けたことがあるが、専門家と非専門家はどうしても教える/教えられる関係になるので、間違いの指摘が「マウント行為」と受け取られるのは避けがたいところがある。専門知識が軽視される昨今の状況においては、専門家による啓蒙活動にはやはり限界がある。

だがそれでもこの状況を放置すべきでないと思えば、専門家は一部の反発を覚悟しつつも、粘り強く専門知識を伝える努力を続ける必要がある。「反ポリコレ」の欲求に呑み込まれた者を説得するのは無理だとしても、しっかりとした知識をもつ第三者の数を増やしていけば、それは歴史修正主義的な風潮に対する社会の免疫を強化することにつながるだろう。こうした取り組みに役立つのが、最新の研究成果を踏まえつつ、それを広く一般に紹介するような入門書である。本書もまた、

ナチズム研究の専門家である筆者が、不正確な情報や怪しげな俗説にさらされやすい重要な論点を中心に、一般読者にできるだけ正確な知識と学説を伝えるべく執筆したものである。

ナチズムのような社会的関心の高いテーマの入門書には、歴史的事実として確定していることは何か、学界で定説とされている解釈はどういうものかを伝えることがもとめられる。そうした手引きがなければ、インターネット上で怪しげな情報に接したときに、真偽を確かめることもできない。初学者が手に取ることの多い入門書で信頼できる情報を提示することは、間違った俗説の流布を防ぐ上でも重要である。

しかしおそらくそれだけでは十分ではない。先ほど述べたように、「歴史知識」を伝えるだけではなく、社会の「歴史意識」にまで踏み込んで語りかける必要があるのだろう。その際に専門家がどのような語り口をとるべきなのか、筆者にも明確な答えがあるわけではない。だが本書は、ナチスをめぐる事実関係や研究史の積み重ねだけでなく

注

予備校教師のツイート 小論文を教える予備校講師のツイートがちょっとした騒ぎとなった。そのツイートは、指導する女子高生がヒトラーのファンで、ナチスの政策を徹底的に肯定した内容の小論文を提出したが、文体が完璧で添削に困った、というものだった。(注は出題者による)

(小野寺拓也・田野大輔『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』を一部改変)

問一 「なぜこのような主張をしたがる人が多いのだろうか」(傍線部)とあるが、なぜなのか。本文を踏まえて、わかりやすく説明しなさい。

問二 学校で歴史を教える教員の責任について、あなたはどのように思うか。この文章を参考にして論じなさい。